
鏡花風月黒子物語

右腕左

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡花風月黒子物語

【Nコード】

N5804Z

【作者名】

右腕左

【あらすじ】

あれ、水森の水クロ昨日の位置とちがくね（本文はこんな口調じゃないです）。

（はい注目）pixiv重複投稿。

たとえ休んでいたとしても丸一日気付かず、風呂にでも浸かった時にふと「そういえばあいつ休んでいたのかもしれないなあ」なんて軽さで思いだすような人物が、少なくとも見積もったとしてもクラスに必ず一人は存在する。

僕のクラスの場合、それに符合するのはまさしく、水森優子という人物だった。

二時間目の国語の時間、そんな水森の微かな変化に僕が気付けたのは、奇跡といっても良い事のように僕には思えた。

その変化とは、水森の左頬でこじんまりと居座っていた少し大きめのホクロが、鏡で映したように真逆、つまり右頬へと籍を移していたのである。

勘違いなどでは断じてない。

なぜなら水森の座る席は僕の右斜め前にあり、こちらからは左頬しか見えない。その条件下で昨日、暇つぶしに僕はもし水森の頬にあるホクロが実はブラックホールだったら、という妄想をたくましく展開していたので、記憶違いという可能性は考えられないのだった。

奇妙過ぎる。これはかなり、僕好みの奇妙さだった。

水森に話しかけるのは何処か躊躇われたけれど、溢れ出る好奇心をついぞ抑え込む事が出来ず、僕は昼休み、一人で小さな弁当箱をつついている水森優子へと声をかけた。

「ごめんちよつといいかな。あのさ、水森って顔のホクロを自由自在に動かせる能力とか持っていたりする？」

ナポリタンが飛んできた。

いや、あまりの出来事に動揺して表わすべき順序を間違えてしまった。

つまり整理すると、僕の質問を聞いて水森は急にあたふたし始め、

顔を反応したフェノールフタレイン液のように真っ赤にして、拳句の果てにナポリタンを弁当ごと僕に投げつけて逃亡。こういう事だった。

不味い事を聞いてしまったのかもしれない。世にも珍しいホクロ移動の病気とか、ホクロ型の妖怪に取りつかれているとか、そういう深刻な内容だったのなら……僕は最低な事をしてしまった。

とにかく謝ろう。僕はそう思い水森を追いかけた。

廊下に出ると階段を上る水森の姿が一瞬だけ見えた。ここは最上階で上は屋上しかない。屋上に向かったのだと推測して僕は屋上へと走った。

案の定水森は屋上にいて、扉とは反対側の右隅に体育座り。膝の上で組んだ両腕に顔をうずめていた

僕は近づき、真摯さを心がけて言った。

「あの、変な事聞いてごめん。もう聞かないからさ」

「マジックなの」

「え？」

水森は目に涙を溜め、僕を見上げて言った。

「マジックで描いてたの。私なんか見てる人誰もいないし、毎日色んなところにホクロ描いて遊んでたの。五つぐらい描いても全く気付かれなかったのに、なんで今日見つけちゃったの？」

少しドキリとした。よく分からない感覚だった。

にしても、その遊びはユーモアに溢れ過ぎているように僕には見えた。輝いて見えた。暗そうに見えて、水森と話すのはとても魅力的な事のように思えた。

「えーと。僕もそれ、真似しても良いかな。というか、友達になつてくれたら嬉しいんだけど……だめかな」

それを聞いた水森はえー、えー、と混乱した様子でよく分からない身振り手振りを始める。脳内で何らかの会議が行われているようだった。

「わ、わたしといてもつままない……と思うよ？ 考えた事を話そ

うとするとごちゃーってなっちゃうし、しどろだし、もどろだし」

「僕も変わらないよ」

恐らくかなり激しい逡巡の末、水森は顔を真っ赤にして俯き、内ポケットから出したマジックをゆっくりと渡してくれた。

僕はそれで、右頬に大きめの点を付けた。

休んでも気付かれないような人物は、ホクロが移動していても気付かれないような人物は、クラスに一人だけだとは限らない。

僕も、その一人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5804z/>

鏡花風月黒子物語

2011年12月19日13時57分発行